

---

R

Mico

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R

### 【Z-マーク】

Z5933D

### 【作者名】

Mico

### 【あらすじ】

瑠美と祐介は1年以上セフレを続けていた。しかし、瑠美が歌手デビュー決定の話をすると祐介はいきなり別れを切り出して…

## 第1章 代償（前書き）

初めての長編小説なので、いたらない點も多々あると想つので、よければ感想など書いて頂ければ幸いです。

## 第1章 代償

多くの人が改札口に向かって歩いて来る中で、瑠美はすぐに祐介を見つけた。

金髪で少し長めの髪を立て、サングラスをかけて、なんとなくだるむつに歩いてくるので、分かりやすかつた。

瑠美が小さく手をふると、イヤホンを外し、表情を変えずにやつてくれる。

瑠美の隣に来て、

「最近や…」

と歩きながら話し始め、瑠美は「まじで！？」とか「ウケる～」と相づちを打つ。

隣にいられることが幸せで、瑠美の顔が次第ににやけてくる。

流行りの洋服を着て、背の高い瑠美は、祐介を追い越さないようヒールの低い靴を履いて隣を歩く。

到着したのは行き着けのホテル。

慣れた手つきで適当な部屋のボタンを押す。

落ち着いた雰囲気の部屋の小さなソファーに並んで座り、祐介はタバコを吸い始める。

1ヶ月ぶりに逢った2人は、その1ヶ月の間に起つた面白い話を

中心にしていく。

1時間半、時には2時間近く話してからようやくベッドに入る。

それからまた30分ほど話す。今度は足を絡め、ベッドの中で抱き合しながら…

全て暗黙のルールみたいなものだった。

「ねえ？」

ん？とだけ答えた祐介は瑠美の鼻の頭を小さくくわえた。

「あたし……『デビュー決ましたんだ…！』

「……良かつたじやん。おめでと」

祐介はおでこと瞼にキスをしながら言った。

「うん、ありがと」

いつもの様に抱き合い

いつもの様にsexをして

いつもの様に一緒にお風呂に入つて…

あつと叫つ間に時間が経つてしまつた

「 なあ……俺らの関係もう今日で終わりにしよう。」  
着替えてる途中に急に祐介は言った。

えつ…

意味が分からない…

祐介は何を言つてゐるの？

自然と涙が零れ落ち、背中を向けたまま聞いた。

「 なッ…んで？」

「 その方が瑠美の為だろ？」

「 いつまでもセフレンなんかやつてたら…ダメなんだよ」

何言つてんの？

全然分かんない…

「 ……ッやだッ…よお…そんなのッ…」

「 ……泣くなつて」

祐介は後ろから瑠美をそつと抱きしめた。

「どうやつて祐介と別れて帰つて來たのか

よく分からぬい…

覚えているのは…

祐介が抱きしめてくれた事と

帰りに自動販売機でタバコを買った事

誰もいない家に帰り、ほとんどどれかけたマイクを落とす。

帰りに買ったタバコは祐介がいつも吸っていた「R」と書かれた物  
それと、祐介に渡すことの出来なかつた「Y」のイニシャルが入つ  
たZippoを持って瑠美はベランダに出た。夜風が肌に刺さる様  
な寒さだ。

タバコに火をつけようとするが、風と慣れない手つきの為、なかなか  
つかない。

ようやく火がつき、吸う。

ゲホツ…ゲホツ

初めてのタバコはつまく吸えず、咳き込むと涙が零れた。  
それを何度も何度も繰り返す…

「アホらしい…」

そう思う頃にはタバコが吸えるようになつていた。  
足元にはたくさん吸い殻があつた。

歌手になりたくて、20歳になった今年も  
その前からずっと  
タバコは吸わないようにしていた。

初めて吸ったタバコは、涙と混じって

苦くてマズかった。

「ツユーすけえ…  
…太陽がなきや…  
月は…輝けないんだよ?」

いつも祐介は暖かく、瑠美にとつて太陽のよつた存在だった。

いつも月を照らして太陽…  
でも…  
決して交わることはない。

やせ細った月が瑠美を一層悲しくさせ、ベランダにしゃがみ込んで泣いた。

”祐介”と蚊の鳴く様な声で何度も何度も呼んだ。

季節はずれの蚊はあまりにも悲しそうだった…



## 第2章 閃光

### some day

すれ違つた人の匂いや　季節や景色  
どこにいたつて　何をしてたつて  
君のことが頭から離れない  
こんなにも君を想うだけで  
苦しくて愛しさ募る気持ち

苦しくて　悲しくて　泣いた夜  
暗闇に飲み込まれそうになつても  
“いつか必ずプラスになる”

そう信じて  
でも　田を閉じれば鮮明に  
君の笑顔思い出せる

すれ違つた人の姿や　声や雰囲気  
どこにだつて君を感じて  
いつかまた　逢える気がして  
愛しさが増す  
叶わないものだと知つても

いつか　君に届くよつて  
どんな時も輝いて

「いつか 真の心に届くよ」ついで

どんな時も歌うんだ

「いつか 君が気づくよ」ついで

そう いつか…

「はあーーーっ。

「デビューア曲がいきなり失恋ソングで本当にいいのかなあ…  
いへり〇〇Kもらっても…」

事務所の一室にこもって、瑠美は独り言を言った。

「俺はいいと思つよ??

元カレへの歌みたいな感じでさ。共感できる。」

「……はあ。どうせ…」

「あ、俺のこと知らないよね??

一応ここで歌手デビューするんだ。だから君とは同期みたいな感じ  
かな??」

「……あつ、そなんですか。  
えつと初めまして、瑠美です。  
えつと…」

「名前言つてなかつたね。  
高田涼。よろしく。」

高田涼：

綺麗な名前…

すごい合ってる…

しかも顔が整ってる…

なんか…オーラが違う

「あつ…よろしくお願ひします」

つて言つても…

こんな綺麗な人が同期つて…

あたし穷つてる感じだ…

涼しげに、

だけど暖かく笑う

彼に瑠美はすっかり見とれていた。

何故だか分からぬけれど

この時、彼があたしの心の暗闇に

一筋の光を差し込んでくれそうな気がした…

早速レコードティングが始まった。

すれ違った人の匂いや 季節や景色…

レコードティングは順調に進み、休憩していた。

「再来週の日曜日のことなんだけど、もうすぐビローする人達でライブイベントやるから。そこでCD先行販売するから、明後日からプロモーションビデオの撮影。

これからハードだから頑張つてね。」

ライブやるの久しぶりだなあ～

「はい。頑張ります。」

夜になつてレコードティングが全て終わり、エレベーターを待つていた。

「お疲れ～瑠美ちゃん」

「あ…高田さん、お疲れ様です。」

「あ～～～、敬語やめようよ。同期なんだし。まあ…俺の方が瑠美ちゃんより年上だと思うけど。もう28だしね」

少しだけ恥ずかしそうに笑つた。

「じゃあ…涼さんって呼びますね」

「まだ敬語だし…  
ま、いつか。  
それよりさ、アドレス教えてよ。」

チーン

エレベーターが到着して乗り込みながらアドレスを教えた。

「ライブ楽しみだなあ～」

「そうで……だね」

「やつと笑つた～良かつた。」

確かに最近笑つてなかつたかも…

泣いてばっかりで

全然前に進んでなかつた…

### 第3章 太陽

「あたし...『デビュー』決まったんだーー！」

瑠美が『デビュー』が決まったと喜んでた。

でも俺は素直に喜べなかつた。

勝手に瑠美の『デビュー』が決まつたら  
この関係を終わらせようと思つてたから...

「.....良かつたじやん。おめでと」

今日が最後のsexだ...

いつもより強く抱きしめて

いつもよりたくさんキスをして

いつもよりたくさん“印”をつけて...

そんなことしか出来ない俺...

情けねえや...

つーか...言わなきやな...

「なあ……俺らの関係もいつ今日で終わってしまうわ。」

瑠美が体を小刻みに震わせ、泣きそうな声で

「なッ……んで？」

と尋ねた。

「その方が瑠美の為だろ？こつまでもセフになんかやつてたら、ダメなんだよ」

瑠美は更に体を震わせた。  
あつと泣いてるんだもん。

「……ッやだよおッ……そんなのッ……」

最低だな……俺。

「……泣くなつて」

俺は後ろから瑠美をそつと抱きしめることが出来ない……

瑠美にとつてこれから、俺がいることで面倒なことになつたり困る。  
瑠美には音楽活動に専念して欲しいくて……

俺さ、最初から瑠美のこと愛してたんだ…

だから前に瑠美が“付き合つて”って言つた時は

正直、すげえー嬉しかつた。

でも俺はひどいこと言つたかもな。

“繋ぎでいいなら”

瑠美がそんな軽い気持ちで言つてないって事は分かつてたんだけど…

俺から瑠美が離れていく時に

自分が辛くなんねえようにしたんだよね。

自分のために…

瑠美は

“じゃあ、やつぱ止めとく。

これからちよくちよく小さなライブハウスでライブやるから忙しい  
し。”

つて無理して笑つてたな…

あの時俺から言つてやれば良かつた…

“愛してる”

つて…

もつ…

瑠美の向日葵みたいに明るい笑顔は見れない。

俺を元気付けてくれる  
魔法の笑顔…

失つて

かけがえのない事に  
ようやく気づいた。

“ 瑠美に逢いたい ”

でも…

瑠美はもう俺なんかに逢いたくねえよな…

それでも逢う方法…

逢える場所…

ライブだ！！

検索すると明後日の夜だった。

デビュー前のイベントみたいなやつか。  
他どうでもいいけど、瑠美に逢う一番いい方法だ。

瑠美が俺を見なくたつていい。  
瑠美と話せなくともいい。

ただ瑠美の向日葵の様な笑顔と

あの声が聴ければいい。

瑠美…

今も歌つてゐるんだろ?つか…

早く瑠美出て来ねえかな…

じつでもいいんだよ。

他の奴らなんか。

まあ…

リョウとかいう奴はましだつたな。

あ… 瑠美だ。

うわ…

瑠美のバラードやつぱやべえよ…

なんか痺れるつてか

訴えられてる感じになるんだよな。

すれ違つた人の匂いや 季節や景色

どこにいたつて 何をしてたつて

君のことが頭から離れない

こんなにも君を想うだけで

苦しくて愛しさ募る気持ち

…ん???

今瑠美と田合つたか???

…氣のせいだよな。

つーか…

やっぱ最高だわ。

先行販売やつてるらしいから買つて帰ろ。

もう俺はいつこう形でしか瑠美を応援できない。

もう一度だけ

瑠美の顔を見て帰ろ。

外で待つてみて

出来たら声でもかけよ。

“ すげえ良かつた ”

つて…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5933d/>

---

R

2010年10月28日04時50分発行